

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：32652

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00685

研究課題名(和文)古英語後期から中英語初期のテキストにみられる古ノルド語とノルマンフランス語の影響

研究課題名(英文)Old Norse and Norman French Influences on late Old to early Middle English Texts

研究代表者

小倉 美知子(Ogura, Michiko)

東京女子大学・現代教養学部・研究員

研究者番号：20128622

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では古英語から中英語への過渡期における古ノルド語とノルマンフランス語の影響について綿密な調査を行った。語彙に関しては、古ノルド語は古英語後期から散発的に見られるものの、テキストの少ない北方方言で用いられたため、言語的類似性から主に基本語が残る結果となった。ノルマンフランス語は、すでにラテン語が古英語から影響していたため、多くの語が用いられたAncrene Riweに比べ、Layamonでは本来語に頼るなど、ジャンルによる借入の程度の違いが見られた。統語的には、非人称表現と再帰表現が両言語で用いられていたため、古英語の表現を助ける形で、語彙交代を伴いながら影響したと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、英語史を正確に書き、また理解するのに役立つと信じている。近年、やさしい英語史と称して表面的な事象だけを初心者向けに提示したり、著名な学者が用いた例を何度も検証せずに用いたりした研究書が見られるが、実際のテキストに戻って筆者自身の目で確かめる、philologicalな態度が必要である。例えばOrmulumは宗教詩であるがeditionが刷新されるのを150年近く待っているし、Layamon's Brutは年代記とロマンスが混合した頭韻詩であるが、そこで借入語が避けられている理由は半世紀以上議論されている。このような時間をかけた研究こそが、中世の言語研究には必要である。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on the influences of Old Norse and Old Norman French on Old and Middle English. It is the transitional period when Old Norse and Old Norman French loan words were started to appear in English texts. Old Norse influences were obvious lexically, morphologically, and semantically, while Old Norman French influences came through Latin or directly, and were partly replaced by Central French later. Textual gap is found between Ormulum (c1175) and Cursor Mundi (c1325), and Old Norse borrowings took time to settle down in written texts. Old French loans were accepted especially in religious texts, and the massive influence in Ancrene Riwe (c1230) showed a striking contrast with the limited acceptance in Layamon's Brut (1275). Syntactic influences can be traced in 'impersonal' and 'reflexive constructions, which existed in the three languages and lengthened the features up to the end of medieval English.

研究分野：中世英語学

キーワード：Medieval English Old English Middle English Latin Old Norse Old French borrowings syntax

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

前回、2017-2019年の研究で、英語に対するラテン語の影響を調査したので、次の段階として古ノルド語とノルマンフランス語の影響を調べることで、中世当時の英語における外来語の影響を明らかにして、英語史の中でも特に変化の顕著な部分を解き明かすことを期待していた。これまでの英語史では両言語の影響は語彙レベルのみに限られるとする言及が主で、また they, their them の paradigm については、一括した借入が強調され過ぎる懸念があったため、このような大まかな記述を改めることも求められていた。

2. 研究の目的

この研究の主な目的は、Old English から Middle English への過渡期に借入された Old Norse と Old Norman French の影響を調査することであった。英語史でよく言われていたのは、Old Norse では音 (give, get の [j] に代わる [g] 音)、形態 (古英語形に代わる both, egg, sister 名土)、代名詞 (they, their, them) を始めとするごく基本的な語彙の借入であり、Old Norman French では文化的・制度的な幅広い語彙の借入で、ラテン語を通じて、あるいは直接に受け入れられ、のちに Central French に置き換えられる等の記述であった。ここで欠如していたのは、借入時期、地域、テキストに現われる際のジャンルの問題であった。その点を解明すべく、過渡期 (11世紀後半から13世紀) という、数の限られたテキストの精読を通して、この時期の影響に関し正確な記述を目指した。

3. 研究の方法

(1) まずは資料収集である。今回、2020年4月1日から2023年3月31日までの研究期間のほとんどが、COVID19のため海外出張が出来ないことになってしまった。その代わりに国内で関西外国語大学、関西大学、広島大学において資料を収集することが出来た。(京都大学と大阪大学を退官した方々が関西外国語大学に移る際に必要な資料と共に移籍していたことが分かり、それらを観覧することが出来た。) また、慶應義塾大学の図書館では、特に大型本のファクシミリ等を活用できた。さらに、この過渡期という時期はテキスト自体の数が限られることから、それらについて書かれた論文等を読む必要があり、科研費の大部分を図書の購入に充てたが、その中でもロンドン大学名誉教授 Jane Roberts 女史と、ケンブリッジ大学教授 Richard Dance 氏の研究書は役に立った。実際、過渡期のみならず、その前後の時代のテキスト、Old Norse, Old Norman French のテキストに関する研究書も対象とした。

(2) 対象時期のテキストの精読に多くの時間を割いた。1121-1160 *Peterborough Chronicle*, c1175 *Lambeth Homilies*, 1200 *Trinity Homilies*, c1175 *Ormulum*, a1200-c1230 *Ancrene Wisse* (MS CCC402), *Ancrene Riwe* (その他の写本), c1275 *Layamon's Brut*, その他いわゆる AB Language の作品、加えて14世紀の Alliterative Revival の詩など、およそ借入語が関係する作品を読み直した。語彙の初出例は *Oxford English Dictionary* (3rd edition) と *Middle English Dictionary* を比べ、早い方のテキストの年代を取り上げ、その語形をチェックした (過渡期から中英語にかけては、年代と方言により形態の variation が数多く存在するため、その検証が必要となる)。

(3) 次にテキストのジャンルと文体に関して焦点を絞り、chronicle, homily, 宗教詩、宗教散文、ロマンス詩等に分類、複数のジャンルにまたがる *Ormulum* と *Layamon's Brut* を対象とした。*Ormulum* は宗教詩であり、East Midland 方言とされながら北の影響が大きく、早くから Old

Norse 借入語を多く含み、they, their them の paradigm も揃って登場することで有名であるが、同じ表現が繰り返し用いられるため、同じ語彙が何度も用いられる結果となっている。Layamon' s *Brut* は chronicle と romance の融合した頭韻詩形で、Old Norman French (ないし Anglo-Norman French) で書かれた Wace の *Roman de Brut* の訳である。従って翻訳体の宿命から、元の言語を用いるか否かが常に問われることとなる。13 世紀後半にもかかわらず、同じ South-West Midland 方言の *Ancrene Riwe* より、はるかに借入語の数が少ない。これについて以前は訳者が Norman French を好まないとされてきたが、Jane Roberts 教授等の調査により、当時の読者層を考慮して借入語を避けていたことが分かってきた。また、借入語が頭韻のめに用いられたとする説を検証するため、中英語の Alliterative Revival の詩を方言とジャンルによって比べたが、頭韻率はさして高くないことが判明した。また、借入の初出年代を比べると、固有名詞はラテン語からの借入が目立つこと、Norman French からの借入はすでに用いられていた宗教関連の語彙の入れ替えも考えねばならないことが分かった。

(4) 統語のレベルに関しては、以前から私自身が研究していた非人称表現と再帰表現とが、Old Norse, Old Norman French でも用いられていたことにより、同じ語でなくても類義語として影響を与えていたため、中世の終わる時期まで、あるいはそれを超える時期まで、2 つの表現の寿命を伸ばしていたと考えられる。この調査は過渡期のみならず中世前期・後期全体にわたって行う必要があったため、さらに対象のテキストを増やして行った。

4. 研究成果

研究の成果として、次のことが挙げられる。

(1) Old Norse の影響については、その言語的類似性から *Peterborough Chronicle* 以後、様々な語彙・語形が借入され、特に北の影響のあった *Ormulum* では顕著な使用が見られたが、その後のテキストにおける出現の少なさは、「Vikings の言語」というイメージもあって、宗教散文等には向かないとの判断がされたものと思われる。しかし借入された語の基本的・日常的な性格から、定着には問題がなかったと思われる。Old Norman French に関しては、Old English 時代のラテン語の借入、特に宗教散文での使用の経験もあり、形態的相違はあるものの、受容への懸念はなかったと思われる。ただし Old Norse のような基本的な語彙ではなかったため、使われる作品によって、同じ方言でも頻度が違い得たと考えられる。このように方言による相違、ジャンルによる相違、spoken と written との相違などを考慮することが、借入語とその活用を考える上では重要であると理解できた。この両言語が、Old English と同じく非人称表現と再帰表現を持っていたことから中世を生き延び、seem や please に代表されるような動詞の本来語との競合・共存を招くことになったと考えられる。この裏には middle voice の形態的欠如があるのだが、形態がないため、例証するのは困難で、非人称・再帰の表現から推測していく以外にはないことも、確認することが出来た。

(2) 2020 年度は学会発表 1、論文 5 編、2021 年度は発表 2、2022 年度は発表 3、論文 2 編、著書 1 冊であった。COVID19 により海外の学会が中止・延期となり、ZOOM 等での開催になるまでの期間待たされたこと、論文の刊行も遅れたことにより、2020-2021 年度は発表数が少なくなった。2020 年度は日本中世英語英文学会で web conference による発表、2021 年度は日本英文学会とスペインの University of La Rioja 主催での web conference による発表、2022 年度は日本英文学会、近代英語協会、日本中世英語英文学会での、いずれも web conference による発表であった。ただし、学会誌や海外の書籍等の発行延期が続いたことで、accept されながら公表を待っている論文が 6 編あることを付け加えておく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 7件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Michiko Ogura	4. 巻 27
2. 論文標題 Verbs and Expressions of Calling a Person/Place/Thing in Old and early Middle English Chronicles and Homilies	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 SELIM	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Michiko Ogura	4. 巻 28
2. 論文標題 'Impersonal' and 'Reflexive' Constructions: Verb Features peculiar to Old and Middle English	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 SELIM	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Michiko Ogura	4. 巻 1
2. 論文標題 The Merger of oE Thincan and Thencan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Festschrift for Jerzy Welna	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Michiko Ogura	4. 巻 1
2. 論文標題 Morphological Merger and Variety in Late Old to Early Middle ENGLISH Verbs of Motion	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Festschrift for Hans Sauer	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Michiko Ogura	4. 巻 25
2. 論文標題 He forbade that he use weopon: a negative element in the that-clause introduced by a verb of prohibition	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 SELIM (Spain)	6. 最初と最後の頁 21-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Michiko Ogura	4. 巻 67.3
2. 論文標題 Begin + (To) + Infinitive: Additional Evidence	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Notes & Queries (Oxford)	6. 最初と最後の頁 301-303
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Michiko Ogura	4. 巻 1
2. 論文標題 Hunger (v.) or be hungry (be + adj.) -- a diachronic choice?	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Diversity of Studies in Medieval English Language and Literature	6. 最初と最後の頁 473-486
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Michiko Ogura
2. 発表標題 'Impersonal' and 'Reflexive' Constructions: Verb Features peculiar to Old and Middle English
3. 学会等名 ICHLL 11 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小倉美知子
2. 発表標題 「男はノアと呼ばれていた」を古英語でいうと：説教集を中心に
3. 学会等名 日本英文学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小倉美知子
2. 発表標題 Drihten, Hlaford, Haelend
3. 学会等名 日本英文学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Michiko Ogura
2. 発表標題 Ah, you are a travelling scholar! --- Verbs of Motion in Medieval English
3. 学会等名 近代英語協会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小倉美知子
2. 発表標題 非頭韻語としてのOld Norse, Old French 借入語
3. 学会等名 日本中世英語英文学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小倉美知子
2. 発表標題 Henri was gehaten -- 人・場所・物の呼び方
3. 学会等名 日本中世英語英文学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Michiko Ogura
2. 発表標題 'Impersonal' and 'Reflexive' Constructions: Verb Features peculiar to Old and Middle English
3. 学会等名 International Conference for Historical Lexicography and Lexicology (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Michiko Ogura
2. 発表標題 I hear him sing or I hear him singing: choice and tendency in Old English contexts
3. 学会等名 SELIM 32
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------